

今回は当館のコレクションより、糸や布を使った染織作品と立体的なファイバーワークをご紹介します。染織は有史以来の技術ですが、20世紀になって美術作品の素材として新しい表現の手段となりました。タピスリーの歴史は古く、ヨーロッパでは中世より大型の壁面装飾として豪華なタピスリーが作られ、ラファエロやゴヤなどの王侯貴族のもとで活躍した画家にとってタピスリーの下絵を描くことは重要な仕事でした。19世紀には機械織りが主流になりますが、20世紀美術において、ピカソやミロが手織りのタピスリーの伝統に注目し、抽象性の高い表現と豊かな色や素材を組み合わせる新しいタピスリーを作り出しています。また、現代の美術における新しい素材への取り組みから「ファイバーワーク」と分類させる美術作品も生み出されました。これらは織物を立体的に造形することで、木や金属やガラス素材とする堅い立体作品に比べて、全く異なる自由な形や量感や風合いを生み出しています。糸を紡ぎ、色を染め、機にかける、あるいは絡み合わせるなどして布に織り、あるいは原毛や糸の状態を活かして縫い合わせていくことは、古くて新しい表現の手段なのです。私たちの身近にある繊維がさまざまな形や色の世界に変幻するさまをお楽しみください。

No.	作者名	作品名	制作年	技法・材質	寸法（縦×横cm）	備考
1	ジョアン・ミロ (1893-1983)	スペインの踊り子	1981(昭56)	パイル織・ウール	200.0×155.0	
2	パブロ・ピカソ (1881-1973)	渦巻き	不詳	パイル織・ウール	190.0×250.0	
3	元永定正 (1922-2011)	タピストリー	1977	ウール	122.0×148.0	谷川知子氏寄贈
4	中川千早 (1943-)	サンライズ・サンセットNo.1	1979	ウール、絹	93.5×93.5	
		サンライズ・サンセットNo.2	1979	ウール、絹	93.5×93.5	
		サンライズ・サンセットNo.3	1979	ウール、絹	93.5×93.5	
5	草間結雄 (1946-)	Landscape Wall B	1982	綿	120.0×212.0× 7.0	
6	藤岡恵子 (1940-) 佐久間美智子 (1945-)	静けさの回帰	1981(昭56)	ウール、麻	サイズ可変	
7	佐久間美智子 (1945-)	大地への回帰	1988(昭63)	羊毛、シュロ	50.0×50.0×10.0	作者寄贈
8	小林尚美 (1945-)	Ito-wa-Ito	1981(昭56)	綿	15.0×220.0× 220.0	
9	磯辺晴美 (1941-2004)	いにしえの軌跡	1990(平2)	麻、ウール、銀糸、 絹、和紙	143.0×289.0	
10	橋本京子 (1945-)	タペストリー「ゴールド I」	1978	金糸	200.0×240	※展示室6で展示しています。

*作品保護のため、会場内の温度、湿度、および照度を調整して展示しています。
また、都合により展示作品を変更する場合がございます。ご了承ください。

【次回予告】「群馬の日本画家 I」 2023年9月16日(土)～10月22日(日)

群馬県立近代美術館